

第10回地域まるごと黒川里山まつりinゆめほたる
記念講演会

「ありまのみこ有間皇子と有間（有馬）温泉」

講師 影山尚之

二〇一五年十一月一日（日） 国崎クリーンセンターゆめほたる

ありまのみこ 有間皇子と有間（有馬）温泉

2015年11月1日（日） 国崎クリーンセンタゆめほたる



影山 尚之
萬葉学者／武庫川女子大学教授

はじめに

題目を見てご推察いただけるとおおり、有間皇子が有間温泉で生まれたという、ただそれだけのお話です。

古代の皇子女の呼称は、その人物を養育した氏族の名に基づく場合——高市皇子や額田王など——と、出生地にちなむ場合——娜大津（博多湾）で生まれた大津皇子など——とがあります。アリマ姓の人物は古代文献・史料上に確認されないため、有間皇子については後者を考えざるをえません。

のちに見るように、有間温泉は七世紀代にすでに発見され利用されていますし、この皇子との接点も確実に見出せますから、彼の出生地は神戸市北区有馬温泉と断定してほぼ誤りません。このことをご存知の方も少なくありませんが、たとえば有馬温泉のホームページを見てもそのことが取りあげられているわけではないので、知らない人もいらつしやるようなので、本日の話題にする所以です。

有間皇子の自傷歌

大津皇子と有間皇子は、万葉集に登場する人物のうちでは一位二位を争う人気者です。どちらも若くして亡くなる、まさに悲劇の主人公ということなのでしょう。さまざまな漫画にも取りあげられて、古典嫌いの女子大生でもこのふたりぐらいいは知っている。和歌山の海南にある藤白神社境内には「有間皇子神社」という祠がありまして、そこに置かれたノートには全国から訪れたファンがいろいろと思いを書いています。古代の美しいロマンといったところですが、万葉集に残した歌はわずかに二首だけ、いずれも謀反事件に関係し

た、翳りのある詠です。

有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む

(2・141)

家であれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

(2・142)

二首は万葉集巻二挽歌部の冒頭に飾られます。題詞に「自ら傷みて」とあるのは、自身の運命を嘆いて、というほどの意、一四一歌に「岩代」という紀伊国の地名が詠まれますから、謀反の罪によって逮捕され、斉明天皇・中大兄皇太子らが逗留中の牟婁温泉（白浜）に連行される途次の歌なのでしょう。もっとも、なぜ「岩代」で歌を詠むのか、なぜ「松」を結ぶのか、など考え始めるとわからないことだらけの二首です。題詞に「松が枝を結ぶ」とありながら一四二歌には松があらわれず「椎の葉」をうたうというのも実は奇妙なこと。こういう作品の宿命として、ほんとうに当人が詠んだものなのか、後の人が仮託したのかという疑念が拭えないものですが、いまはそういう議論には立ち入らないことにします。

いずれにせよ第一首は、牟婁温泉に向かう途中に岩代（現在のみなべ町）の海岸で松の枝を引き結び、「もし無事だったら帰路これを見よう」とうたうのです。第二首は、旅先ゆえ普段の食器ではなくて椎の葉に飯を盛る、と不自由な身の上を嘆くもの。「真幸くあらば」というのは「真幸く」なかった結果を予見した表現ですか

ら、「椎の葉に盛る」には異常な旅が象徴されています。たとえ旅先であっても器ぐらいいは携行するでしょう、それを小さな椎の葉に飯を盛るなんて、どこか死者への供養を思わせもしますね。先に「翳り」と言ったのはこうしたことを念頭にしています。

有間皇子の系譜と行動

一四三歌以下後続する歌々にはあとで触れることにして、まずは有間皇子の動静を概観しておきましょう。資料1ページの系図と年表を併せてご覧ください。日本書紀孝德天皇大化元年条には有間皇子の出生を記録しています

ただし、日本書紀は天皇即位の時に皇妃皇子女を一括して載せるのが慣例で、有間皇子が大化元年生まれということではありません。生母が阿倍倉梯麻呂のむすめ小足媛であることと、孝德天皇にほかに子がいないことにご注意ください。祖父の阿倍倉梯麻呂は大化元年に左大臣に上っていて、孝德天皇によるいわゆる大化の改新を補佐した重臣でした。

ちなみに、孝德天皇は皇極（斉明）の弟ですが、皇極とその夫・舒明天皇との間に中大兄・大海人兩皇子がおり、結果を先取りするなら皇位の正統はそちらにあるらしいことも要点です。有間皇子は、いまふうに言えば、「微妙な」立場に置かれていました。

九月に、有間皇子、性黠くして陽狂す、云々。牟婁温泉に往き、病を療むる偽して来、国の体勢を讚めて曰はく、「纒彼の地を觀るのみに、病自づからに蠲消りぬ」と云々いふ。天皇、聞しめし

て悦びたまひ、往おほしましてみぞこなはさ観おほさむと欲す。

〔『日本書紀』齊明天皇三年条〕

齊明天皇三年、有間皇子十八歳のとき、意図的に狂人を装い、牟婁温泉に療養に赴きます。病のふりをしたのは、微妙な立場ゆえでしょう。

ところが皇子は、帰京後病が癒えたと天皇に報告します。このあたりの記事は、「性黠くして」という書きぶりを含め、事実そのままではないでしょうから解釈がむずかしいですが、あるいはこの時に有間皇子自身が皇位を狙う決意をしたということなのかもしれません。病気を理由にしながら遠い牟婁にまで単身赴くなんていささか理解に苦しむ行為で、また狂人を貫くのではなしに治ったと宣言するあたりが不審です。

ですが、翌年に実施されることになる紀伊国行幸の下見を兼ねた——つまり謀反実行計画を立てるための——行動とすれば納得できる部分がなくもありません。大化改新によって国内の交通路は整備されていますから、遠距離の旅は可能になっていました。自身に加勢してくれる在地豪族を募る、などということがなされたのかもしれない。いずれも想像に過ぎませんが、背後事情はいろいろとありそうです。

有間皇子の計画

齊明天皇四年十一月の記事は有名です。行幸のため天皇不在の都をあずかっていた蘇我赤兄が、有間皇子に齊明天皇の政治の批判を

ん。もつとも、天候などの諸条件が考慮されていないなど計画はいかにも粗っぽく杜撰で、天皇・皇太子に事前に情報が伝わってさえいれば、計画を未然に阻止するのはたやすいことだったでしょう。

日本書紀に見る有間皇子事件

3ページの表で日本書紀に記録される事件関係者の動向を見ると、処刑されたのは皇子を含めてわずか三名のみ、うち二人は流罪に処されているものから比較的近い土地への配流であり、実際に皇子に荷担した勢力がごく少数であったことを暗示します。坂合部氏・塩屋氏とともに軍事的氏族としての性格を帯びるものの有力氏族とは言いがたく、御坊の南に「塩屋」の地名が残ることをもって推測すれば塩屋氏は在地豪族出身者なのでしょうが、それにしても塩屋氏だけが有間皇子の頼みの綱であったように見えます。有間皇子の母方である、有力氏族・阿倍氏が皇子に荷担したという記録はありません（4ページ参照）。

限定的な紀伊国行幸

かくして、事件の構造はきわめて単純です。皇極天皇二年に起こった山背大兄王殺害事件、大化元年の古人大兄皇子事件（3ページ）など皇位継承問題にからむ同趣の事件が前後に頻発しており、有間皇子も前帝の長子ということで中大兄とほぼ対等の皇位継承資格を有するところに事件の種がありました（3ページ太字部分参照）。

たしかに単純な事件ではありましたが、しかし紀伊国牟婁を目的地とする行幸はなぜかその後継続しません。齊明四年の次に実施さ

語るのでした。それを聞いて皇子は赤兄を味方と信じ込むのですけれど、五日に赤兄宅で謀議を交わしている最中、夾脇が自然に折れるという不吉なことが起こった。それで打ち合わせを中止し帰宅したのち、夜半に赤兄が発した軍勢によって皇子は逮捕されるということです。

いかにも仕組まれた筋書きという印象を受けますね。日本書紀が多分に虚構を盛り込んでいるのだとすると、真実のほどはわかりません。五日夜半に逮捕された人物が九日には牟婁温泉で訊問を受けるということが物理的に可能なのかどうかも疑問です。しかしながら、「或本に云はく」以下の記事はたいそう具体的で、正伝にない人物や事情も記されているところを見ると、ここに書き留められているような計画——牟婁津の孤立化作戦——が前年の紀伊下向の折にはかられていた可能性はあります。

有間皇子と蘇我臣赤兄・塩屋連小戈・守君大石・坂合部連薬と、短籍ひねりぶみを取りて謀反けむ事をうらなトふといふ。或本に云はく、有間皇子の曰く、「先づ宮室を燔やき、五百人を以ちて、一日ひとひふたや兩夜牟婁津を邀さきざり、疾く船師ふねいっせを以ちて淡路国を断ち、牢圍ひとやの如くならしめば、其の事成し易けむ」といふ。或人諫めて曰く、「可よからじ。計る所は既に然れども徳無いさほひし。方今いまし皇子、年始めて十九、未だ成人ひととなに及らず。成人に至りて其の徳を得べし」といふ。

なるほど白浜の地は東は山間部ですから逃げ道は海しかないので、計画どおりに事が運んだら成功の可能性はあったかもしれない

れた紀伊国行幸は持統四年（六九〇）ですから、三十二年間も途絶えていることになるのです。実はそれはたいへん奇妙な現象です。牟婁温泉を目的地として齊明天皇一行が旅をするということになれば、当然現地には離宮的施設が造営され、行幸途次に行宮も設営されますから、それらが一度きりの利用では不経済に過ぎるので、せめて数年に一度ぐらゐの頻度で行幸が企画されてしかるべきなのです。ところが、持統四年の次は大宝元年（七〇一）、その次は聖武天皇神亀元年（七二四）と間隔が空きますし、それらはいずれも天皇即位や大宝令発布など国家的大事のあったときに限られていることに気付きます。紀伊国行幸はたいそう特別な、限定的なイベントだったことになりました。もちろん大規模の遠距離行幸なので特別には違いないのですけれど、穿うつてみるならば、はじめての紀伊国行幸において有間皇子謀反事件が勃発した——国家的危機に直面した——という苦い経験・反省が、紀伊国行幸の扱いを特別化したのかもしれません。事は未遂に終わったものの、万一有間皇子の思惑通りに運んでいたら国家の転覆もありえた、ということなので、その後の紀伊国行幸は徹底的に万全を期した、厳重な警備体制を備えた隊列が構えられなければならなかったのでしょう。大きな出来事があった年に限られる、特別な時だけに紀伊国行幸が固定されるというのは、そのような事情を考えないと理解しにくいのではないのでしょうか。

紀伊国行幸で偲おもばれる有間皇子

とすれば、紀伊国行幸が挙行されるにあたって、有間皇子事件

を、有間皇子その人を、旅中の宮廷びとが想起するのは必然でありました。皇子による自傷歌二首に続けて配置される歌々は、最後の一四六歌以外の作歌時期を明確にしませんけれど、いずれも大宝元年の紀伊国行幸における詠であった可能性が大きいと思います。

長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀しび咽ふ歌二首

岩代の崖きしの松が枝結びひけむ人は反りてまた見けむかも

(2・一四三)

岩代の野中に立てる結び松心も解とけず 古思ほゆ 未詳

(2・一四四)

山上臣憶良の追和する歌一首

翼なすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

(2・一四五)

右の件の歌どもは、柩を挽く時に作る所にあらずといへども、歌の意を准擬す。故以に挽歌の類に載す。

大宝元年辛丑、紀伊国に幸す時に、結び松を見る歌一首

柿本朝臣人麻呂が歌集の中に出づ

後見むと君が結べる岩代の小松が末うれをまた見けむかも

(2・一四六)

巻九には大宝元年の紀伊国行幸関係歌十三首が収録されていますので、長意吉麻呂らもこの行幸に供奉したのでしょう。人麻呂・憶良・意吉麻呂は同時代の宮廷歌人と称しうる存在です。詠歌はいずれも牟婁温泉往還に「結び松」を見て往時を思い追慕するというもの。

・冬十月に、有間温湯宮ありまのゆのみやに幸す。

(『日本書紀』舒明天皇十年十月条)

・冬十月の甲寅の朔にして甲子に、天皇、有間温湯に幸す。左右大臣、群卿大夫、従へり。十二月の晦に、天皇、温湯ゆより還かへりまして、武庫行宮むくのかりみやに停とどまりたまふ。「武庫は、地の名なり」。

(『日本書紀』孝德天皇大化三年条)

日本書紀による最初の有間温泉行幸は舒明天皇三年(六三二)九月、その次は同十年(六三八)十月。一回目には「有間温湯」とのみあるところが二回目になると「有間温湯宮」と記されますので、この時期に有間温泉を目的地とした行旅が頻繁に行われ、恒常的な宿泊施設が設けられて、王権の直轄地の扱いが開始していたのだらうと推察できます。日本書紀が国内の温泉について記すのはこれが最初、その意味で有間温泉は日本最古の温泉といつてよいことになりそうです。当時の同地の温泉施設がどのようなものであったのかはまったくわかりませんが、「温湯宮」については現在の善福寺(8ペーシ地図参照／曹洞宗、行基による開山と伝える寺です)前面の山麓にあったという伝えが残っています。

有間温泉で生まれた皇子

さて、レジュメには記しませんが、舒明十年十月の有間温泉行幸は、天皇の飛鳥京帰還が翌年正月八日と記されますから、かなり長期間に及んだことを知ります。有間皇子の誕生は、処刑された時の年齢を十九歳と記すのに従えば舒明十二年生まれとなって、

事件の本質に触れるのではなく、旅の途上で落命したいにしない皇子をあわれむという趣旨で、歌びとたちは一様に往時を偲びます。岩代の地はいわば「名所」化しているわけで、「松」はその象徴として、往時を偲ぶよすがとしてとらえられているのです。

読んでみると、松の印象が各歌ですこしずつ異なっていることがわかりますね。「崖」の松だったり「野中」の松だったり、「小松」と言ってみたり…。たぶん、彼らに正確な記憶や情報が共有されていたわけではないのでしようね、五十年も昔のことだから、どの松を皇子が結んだのかなんてわからなくなっている。「名所」とはそういうもので、能勢の「野間の大櫨」ほど立派な大木なら別ですが、海辺に松は群生しますから特定はできっこない。現代ならば無理矢理に特定して説明板など立てるのでしようけれどね。

いずれにせよ、有間皇子自傷歌は、これら後の人の追和歌を待つてようやく完結します。有間皇子自傷歌二首に対する題詞「松が枝を結びて」という記述は、揃って「結び松」をうたうこれら追和歌に基づいて付されたものと考えています。

有間(馬)温泉行幸

さて、ここまで有間皇子事件と歌をめぐってお話ししてきた、有間皇子と白浜温泉のことには触れましたけれど、北摂・有間温泉とのかかわりについては棚上げのままにしてみました。まずは有間温泉を目的地とする当時の行幸を確認してみることしましょう。

・秋九月の丁巳の朔にして乙亥に、津国の有間温湯ありまのゆに幸いでます。
(『日本書紀』舒明天皇三年九月条)

一年の食い違いはあるものの、薨去時の年齢に誤りがある可能性も皆無ではないし、舒明天皇帰還後にも有間皇子の父・孝德天皇(當時は軽皇子)と母・小足媛とが温泉に残ったということも考えられるし、いずれにしてもこの時の行幸と有間皇子の誕生とを結びつける蓋然性はきわめて高いとみるべきでしょう。日本書紀皇極天皇三年条には軽皇子が脚の病を患っていたことが記されますので、そうであれば温泉療養を継続・延長する意味が大いにあります。もちろん、行幸とは別に再び軽皇子夫妻が温泉に向かったという可能性も考えられていい。孝德天皇は即位後大化三年にも大規模な行幸を仕立てて有間温泉に逗留します。よほど気に入ったのでしょう。先に申しました紀伊・牟婁温泉行幸とちがいで、こうした頻度で実施されるほうがはるかに自然なのです。

有間温泉の創始

摂津国風土記逸文にも有間温泉の創始に関する記事が載ります。
摂津国風土記に曰ふ。

有馬の郡。また塩之原山あり。この山の近くに塩の湯あり。この辺なるに因りて以ちて名とせり。

久牟知川。

右は、山に因りて名とせり。山はもと功地くちの山と名づく。昔、難波なみの長樂ながらく豊前宮とよみに御宇あめひし天皇の世、湯泉に車駕幸したまはむとして、行宮を温泉に作りたまひき。時に材木を久牟知山に採る。その材木美麗うらし。ここに勅みことして云のりたまはく、「しが山は功ある山ぞ」とのりたまひき。因りて功地山と号なづく。俗人弥くに誤あやち

て久牟知山と曰ふ。また曰りたまはく、「始めて塩の湯を見つ」と云々。土人云はく、「時世の号名を知らず。ただ、嶋の大臣の時と知れるのみ」といひき。

〔『新日本紀』所収「摂津国風土記逸文」〕

ここには、孝徳天皇が温泉行幸を予定して行宮を建設しようとし、久牟知山で木材を調達したという記録（伝説？）が見えています。地名の由来はともかくとして、語られていることから事実はある程度反映していると見てよろしいでしょう。「塩の湯（＝有間温泉）」の発見について「嶋の大臣の時」であるというのは、四代にもわたって大臣を務めた人物ゆえ発見時期を絞り込めないのですが、わざわざ蘇我馬子の名を書き留めるところをみると、温泉開発に蘇我氏の関与があったものかもしれません。有間温泉が王権に直結する温泉地として扱われていることは、その想定と矛盾しません。

有間行幸と「武庫行宮」

さて、先に見た大化三年の行幸では「武庫行宮」が記録されていました。孝徳天皇による皇都は難波長柄豊崎宮（上町台地上、法円坂）に置かれたので、有間温泉から難波に戻る途中に武庫行宮が設置されたこととなります。頻繁な行幸を支えるには、都と有間温泉との間のアクセスの確保と、道中の宿泊・休息施設、また食糧供給体制などの確保が必須です。武庫行宮はまさにそうした施設とみられますが、それをどこに比定しうるか、という点に触れておきましょう。5ページの地図「摂津国の古代交通路」をご覧ください。

となる。一方、この道に一致する直線道を逆に南南西にたどれば東武庫、西武庫の古い集落、すなわち武庫郡名の発生地であり、したがって武庫郡の中心をなす地区であった可能性の大きい一帯に至る。これらのことはC—G道路の古さを示唆するように思われる。直線が昆陽池の一角によって断ち切られているから、昆陽池の拡がりに変化がなかったとすれば、C—G道路は池の造成に先行してあったと確言できる。これらA—F古道、C—G古道を切って南東から北西へ直進するH—J道路が、他の二道よりずっとあざやかな直線を示して、そこにある。

（足利健亮『日本古代地理研究』）

昆陽寺の門前あたりから南東に向かう道路は現在も——当時の計画古道とまったく一致するのではないもの——存在し利用されています（最終ページ道路地図参照）。北西につづく道も同じです。この道が武庫川を越えるとそこは宝塚市小林・高司の集落に行き当たりますが、付近に「美幸町」とか「御所の前」とかいう地名が残っています。レジュメ5ページに引用した『宝塚市史』はこの地点が「武庫行宮」の伝承地であると記しています。

現在宝塚市高司の北に、御幸道または御幸通とよばれる地名があり、また蔵人の北部、小林の東側に字御所の前という地名がある。この地に祇園社があるが、この神社付近がそれではないかといひかたがあり、この付近には字堀の内の地名もあって、その遺跡として有力視されている。つまり、行宮の所在地は武庫川の西側

足利健亮氏『日本古代地理研究』をはじめとする歴史地理学の知見は、難波京から有間温泉を目指した計画古道の存在を明らかにしました。地図の右「楠葉駅」から南西に「須磨駅」まで延びる道は山陽道で、江戸時代の西国街道はほぼこれに重なり、現在の国道一七一号線が踏襲します。「西国街道」の道路標示を伊丹市内や西宮市内で見かけることは少なくありません。このルートと「E」マークのところで交差して南東から北西に向かう道路、これが難波京から有間温泉を目指す計画道路です。道は有間を越えてさらに山陽道また山陰道へと繋がってゆく、という見方も近年は有力になっています。その点は今日のところは擱くとして、「E」マークはみなさまよくご存知の昆陽寺を指します（5ページ左下写真参照）。この地点でふたつの道路が交差するというのはとてもおもしろい示唆があります。6ページ右上下の地図は足利氏の著書に掲載されたもので、あわせてご覧ください。

北東のAから南西のE方向に曲折しながら通じる道は近世の西国街道であるが、大筋では古代の山陽道を踏襲する。この道の著しい曲折は恐らく古代から近世までの間に次第に形成されたもので、原初的にはA—Fを結んだ直線、あるいはB—Dを結んだ直線上に測設された計画古道であったとみて大過ないと考える。次に、C付近から昆陽池、瑞ヶ池の西辺を縫って北北東向する道が見え、それは川辺郡の式内社である加茂神社付近を指して進むようである。加茂神社の位置は伊丹段丘面の北東端に当たり、その先へ直進すれば猪名川の谷を溯り、長尾山中の直道に接続するこ

で蔵人の北部、小林の東、伊子志の南にあたる一画であると推定されているわけである。とすると、孝徳天皇の有馬行幸の道すじは、都の難波長柄豊崎宮から、海を渡って津門（現在の西宮市内）に至るか、陸路より津門を経て、蔵人の地を通り、伊子志に出て、生瀬方面を通って有馬に向かったというみかたができ、この時代の一つの交通路としてみる事ができるであろう。

（『宝塚市史』第一巻）

考古学の成果に基づき証明はできていませんけれど、この地であれば「武庫行宮」と称されておかしくありませんし、難波京から有間温泉に行く中間地点にあたっていて、なるほどという場所です。ここから生瀬、船坂を越えて有間に入るわけです。

万葉集巻七には、

しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて

（7・一一四〇「摂津作」）

という歌がありますが、この旅人はおそらく有間温泉を目指しているのでしょう。そうでなければ「有間山」をうたう意味が不明になるからです。有間温泉を取り囲む山が猪名野付近から見えるはずがありませんから、この山は現在の六甲山と受け取ってまちがいはありません。「猪名野」というのは尼崎・伊丹あたりに広がる野なので、旅人はきつと難波京から有間に向かう先ほどの道を辿っているのだと思います。山陽道を下るのは「猪名野」の中心部を通ることが

ない。6ページの地図で押さえるなら、「猪名寺跡」「御願塚」のあたりを北西に歩み、そして昆陽寺の交差点に出ます。いま、国道一七一号線を西に向かつて走るとき、昆陽寺を過ぎてすぐに右前方を見やれば六甲山があらわれます。旅人が見ているのはその景観だとわたくしは思います。

このルートに行く旅がそれなりに頻繁だったろうことは、坂上郎女が詠んだ「尼理願の死去ることを悲嘆して作る歌」(3・四六〇)〔四六一〕レジュメ7ページに引用)によっても知られます。坂上郎女の母・石川命婦が病氣療養のため有間温泉に逗留中、大伴家に寄宿していた新羅の尼・理願が亡くなった。その葬儀全般を母に代わって取り仕切った郎女が、温泉の母に宛てて報告をしたというのがこの歌。「嘆きつつ我が泣く涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りきや」という描写からすると、坂上郎女もかつて有間温泉を訪れたことがあったにちがいません。

摂津国府の移転

ところで、時代は降りますが、平安時代になって摂津国府を移転するということがありました。関係資料は次のとおりです。

乙酉に、摂津国治を江頭かはのぼとりに遷す。

(『日本後紀』延暦二十四年〔805〕十一月条)

癸未に、摂津国治を豊嶋郡家より南の地に遷す。

(『日本紀略』天長二年〔825〕四月条)

戊子、摂津国言さく、去る天長二年正月二十一日と承和二年十一

月二十五日との両度の勅旨に依り、河辺郡為奈野を定めて国府を遷し建つべし。しかして、今、国弊れ民疲れて、役を發するに堪えず。望み請ふらくは、彼の曠野に遷すを停め、すなはち鴻臚館を以ちて国府と為し、且つ修理を加ふることを請ふ。勅してこれを聴す。
(『統日本後紀』承和十一年〔844〕十月条)

『事典日本古代の道と駅』には次のような解説があります。

摂津国はもともと難波京を管理する摂津職が国治を兼帯していたから、職は難波京内にあった。延暦十二年(七九三)に難波京が廃されてからは、国府を旧京域内に置く必要はなくなったので、交通の便のよい「江頭」に遷されたのであろう。

「江頭」とは難波堀江のたもとのことです。それが次に「豊嶋郡家」の南に遷される。これは承和十一年に「河辺郡為奈野」に摂津国府を移転する計画の準備段階とみて誤らないでしょう。もともと、その計画は民をいたずらに疲弊させるといふ理由で中断し、結局難波の鴻臚館を利用することになるのですが、為奈野(猪名野)に摂津国の中心を置く準備はそれなりに進行していたはずだ。

移転候補地になっていた為奈野とは、おそらく新旧山陽道駅路が交差する交通の要地である昆陽と思われ、付近に鴻池などの地名も残っている。
(『事典日本古代の道と駅』)

右の指摘どおり、伊丹市内に「鴻池」という地名があります。「こののいけ」の「こう」は「国府」の転である可能性があるのです。この地に国府移転を計画したのは、平坦な地勢であって都および難波津からのアクセスもよいということが条件としてあったので

しょうが、何よりも大きな要因は、山陽道ルート上であり、しかも山陽道と難波―有間(山陽道・山陰道)との交わるまさに交通の要衝地であって、しかも昆陽寺のような施設が設けられる先進的な地域であった点にあります。継続利用されていたかどうかはわからないものの、ほどちかいところにかつて武庫行宮という王権の施設が営まれた、というのも重要なことだったでしょう。

有間皇子と有間温泉のテーマからはまた逸れた格好になりましたが、皇子が父孝徳天皇(軽皇子)とともにこの道を利用して難波宮と有間温泉とを往還し、武庫行宮にも一度なりず逗留した、という想像をお伝えしようと思っただけです。伊丹でも宝塚でも、そのことを取りあげてPRしているというのを聞いたことがあります。が、それぞれの市としてはもつとアピールしてもいいような気がします。具体的な遺跡が残っていないから仕方ありませんけれど。

むすび

有間皇子は温泉で生まれ温泉で一生を終えた人物ということになりそうです。彼が白浜温泉を舞台に謀反を計画したのは、これまた想像に過ぎませんが、幼児期に温泉の風土を体験し、温泉行幸の警備体制のゆるさ、欠陥を知悉したからかもしれない。それゆえ、皇位奪回の唯一の機会を斉明天皇牟婁温湯行幸時に求めたのではな